2014 年度後期早稲田大学雄弁会
第一回演練会議提出レジュメ

「類義累積概説」

文責：2014 年度後期演練幹事 **ニノ宮裕大**

・序–レトリックとは

レトリック（英 rhetoric）とは、紀元前 5 世紀に古代ギリシアに始まり、以来二千数百年にわたって西洋に継承されてきた言語技術の体系である。その長い歴史の中 で、〈レトリック〉ということばは、実にさまざまな意味を付加されてきたため、今日のわれわれがこのことばを定義するのは容易ではない。『オックスフォード英語辞典』（OED）の第 2 版では、rhetoric に 14 の定義を与えているが、その中でとくに重要なものは以下の 3 つである。

- *他人を説得したり感化したりするためにことばを使いこなす技術。自らの思想を巧みに表現するために、話し手や書き手が従う一つの規則。*
- *その技術についての研究。*
- *説得を計算したことばづかいによって表現された話または文章。そこから、わざとらしい、あるいはこれみよがしな表現を特徴とする文体。*

rhetoric はこのように多義な語であるから、特定の日本語を訳語として当てることには無理がある。

普通には、〔1〕の「技術」を意味する場合には「修辞法」、〔2〕 の「研究、あるいは学問的体系」をさす場合には「修辞学」、〔3〕の「個々の表現」については「修辞」と訳し分けられている。また、古代ギリシア・ローマ以来の演説組み立ての技法をさす場合には、「弁論術」「雄弁術」などの訳語が与えられることもある。

最近の傾向としては、このような訳語選択の煩わしさを避けるために、また日本語の「修辞」ということばが、「ことばの飾り」や「美辞麗句」を連想させ、レトリック本来の意味と合わないという理由から、 とくに訳語をつけようとせず、そのまま「レトリック」と音訳して使用するのが一般となってきている。

もちろん、本レジュメにおいて修辞学に関する専門的詳述を行うつもりは毛頭ない。演練すなわち、説得という目的に適う方法として、 1 または 3 で挙げられる様な「修辞」を重点においた技術のごく一部を伝授したく思う。

本演練会議においては、演練助言方針「類義累積による文章の印象化」に基づき、演練助言を行う所存である。まず、第一回目に関しては「類義累積」自体の説明、それを用いた具体例を挙げつつ、演練助言を行う。会員諸兄が言説を発信する際、本助言を役立て、説得活動に邁進されることを真に願う。

・類義累積とは

「屍を殺す為だけに用意された不死殺しの屍――…」
*「人はそれを**畏怖と憐憫と侮蔑と嘲笑**を込めて――…」*
「『屍姫』とそう呼ぶわ」
――『屍姫』 1巻 53〜54 ページ
(赤人義一 / スクウェア・エニックス ガンガンコミックス)

以上の**畏怖・憐憫・侮蔑・嘲笑**のように、似た意味を持つ語を複数並べる技法を類義累積と呼ぶ。つまり、同じ意味内容を示すために、語を重ねて表現することで、文章自体の重みが増す技法であるといえる。これは演練において重要である共感に大いに資するものである。なぜならば、共感においては論理的な共感と直感的な共感と二分されるため、表現の厚みが増すということは、直感的な共感の可能性を最大化させるという目的に適う技法といえるからである。

*「**髪は黒！！***
ピアス禁止！！
シャツのボタンは
第二ボタンまで！！
ベルトは腰で締めろ！！
***靴のかかとは踏まない！！**」*
「これが見本だ！！」
――『会長はメイド様！』 1巻 4 ページ
(藤原ヒロ / 白泉社 花とゆめ COMICS)

以上で挙げた例は、類義累積の応用例である。

類義累積とは、単純な類語を並べるにとどまる技法ではない。ここにおける太字を用い

た文章における語は、厳密には類語ではない。ここでは、「髪は黒〜靴のかかとは踏まない」といった、連続した描写によって「規則正しい学生の姿」を表現しようとしていることは理解できるだろう。つまり、概念的な「規則正しい学生の姿」という表現を、以上の様に、類義累積を用いて直接的な描写を並べることで、読み手・聞き手にとって理解できる描写を可能としたのである。

類義累積の効果は、大きく分けて二点挙げられる。

一点目は「**印象を強くする**」。似たような言葉を続けることによって、印象的な文章を可能とする。

二点目は、「**苦しまぎれ**」。適切な言葉が見あたらず、一言で上手く言い表せない時、頭にあるイメージに近い言葉を積み重ね、表現の幅を広くする。

これらによって、直感的な共感を呼び起こすことが可能となる。

実際に、演練においてこの技法を用いる場合は、自らが一番訴えたい文章において、使用することでその文章を印象的に描写することが可能となる。

・類義累積の実用

前項では類義累積の説明を行った。本項ではこれを実際の演練にどう役立たせるのか、会員の弁論を用いて具体的に説明したい。

彼らもいつまでも施設にはいられません。
*やがて**辛く、厳しく、激しい社会の荒波**の中で、*
一人で生きていかなければならないときがくるのです。
–(清水寛之会員日吉杯弁論)

この例では、「社会の荒波の厳しさ」を「辛く、厳しく、激しい」と描写することで、施設の子ども達が社会に出た後の困難さを印象的に訴えている。この弁論を通して清水寛之会員が訴えたものは「施設の子どもたちが社会に出た後の困難性」である。

この様にして、自らが特に訴えたいことを似た意味の語を並べることで、問題意識を印象的に描写し、直感的な共感を求めることができる。

レイプはなくなりません。戦争と同じように。暴力と同じように。
–(大久保会員五月祭弁論)

この例では、レイプを戦争・暴力と並べることで、「社会からなくならない性質のもの」であることを印象的に訴えている。もちろん、辞書上ではレイプは戦争や暴力の類語ではない。しかし、似たようなものであるとを訴える際、この様にして、並べて描写することでより共感を求めることができる。

彼らに翼を与えるのは何でしょうか。
それこそが親です！学校です！社会なのです！
–(酒井会員拓大総長杯弁論)

この例では、「子どもに対して翼を与えるもの」といった概念を締めの文章において表現している。そこで親・学校・社会といった様に「教育」の共通項で括れるものを並べることで、子どもにとっての教育の重要性、教育を行う主体を印象的に表した文章だといえる。

この様にして、表したいものを直接表現せずとも、関連する語を並べて描写することで、文章の印象化が可能となる。

インフラもない！社会保障もない！
誰ひとりとして、幸福を追求できない絶望的な未来が待ち受けているのです。

–(川村会員日吉杯弁論・改)

この例では、「幸福を追求できない絶望的な未来」といった概念を「インフラもない！社会保障もない！」と、直接的な描写を並べることで、理解が容易で共感を呼び起こせるものとしている。

この様にして会員の理念といえる「幸福を追求できる」といった概念を、「インフラ、社会保障がある」といった現実的・客観的な描写を類義累積して説明することで、理解を促すことができる。

・結

お気づきになられたかもしれないが、普段説得を試みる際には無自覚的に近からず遠か

らず類義累積の技法に近いものを用いているかもしれない。それは、難しい言葉を相手に伝える際に、抽象から具体に落とし込むところではないだろうか。つまり、理想社会像を分かりやすい文章にする際、理解が容易なものを用いて、描写することである。その際、本レジュメで習得した類義累積を意識的に用いることで、理想社会像にあるような難しい言葉を、現実的・客観的で分かりやすい日本語を並べて描写することで聴衆に対し、より一層の理解・共感を得られる説得を行って頂きたい。

以上

・参考文献

『ことばの知識百科』(三省堂)
『レトリックの消息』（佐藤信夫 / 白水社）